

経済史

経済史部門における研究・教育の主眼は、「世界」のあり方を歴史的視座から読み解くために必要な分析手法を確立することにある。

学部専門科目の「経済史A」、「経済史B」、「経済史C」は、基本的に従来からの西洋経済史、東洋経済史、日本経済史に対応しているが、あえてA、B、Cと区分してあるのは、相互に他の分野と統合・協働し、たとえば「産業革命」というテーマで、西洋経済史と日本経済史が連携しながら講義を行うことができるよう、教育的融通性を確保しておくためである。また、「経済史B(東洋経済史)」は、今では他大学でも類似の科目が存在しようが、本学経済史が明治期以来主張してきたひとつの学問伝統である。アジア史の一環としての日本史、「ヨーロッパ中心史観」からの脱却など、「日本」や「ヨーロッパ」を相対化する思想がその背後にあり、21世紀の今日、その重要性はますます増している。

学部教育科目としては、以上の「経済史A、B、C」のほかに、「経済史入門」「基礎ゼミ」がある。「経済史入門」は、主として1、2年生を対象としたコア科目である。経済史部門の教員全員がローテーションで担当し、各国の経済発展を比較史的視座から講述するなかで、史料の取り扱い方、歴史的な構想力の大切さ、また、経済史分析の方法論(実証主義、マルクス主義、数量経済史、生態史観、社会史、グローバル・ヒストリー等)について教示している。「基礎ゼミ」は、学部1、2年生にも担当教員の専門領域に触れる機会を提供しながら、経済史方法論についてのインテンシヴな勉学の間となっている。

学部・大学院共修科目としては、「比較経済史」、「文明史」、「現代経済史」、「経済史特殊問題」がある。「比較経済史」は、本研究科におけるコア科目である。「経済史入門」と同様、経済史部門の教員全員がローテーションで担当し、文字どおり各国経済史を比較する方法について講述している。経済の展開過程を、各国・地域の固有の事情(歴史的条件、人的資本のあり方等)との関係性において考察する方法や、比較を通して世界史認識の眼を養うことが目的である。「文明史」は、経済領域に視野を限定せず、それぞれの国・地域で歴史的に形成された経済社会構造を、文明論的視点から総体的に把握できるようになることを目的としている。経済活動、経済システムは、政治や社会のあり方に規定され、またそれらに影響を与えている。そのことを、実証的・理論的に講述する場となっている。他方、「現代経済史」は多様な講述内容をとりながら、「現代とは何か」を歴史的なパースペクティブで明らかにすることを狙いとしている。また、「経済史特殊問題」では、個別の特殊なテーマに即して、史資料の取り扱い方などの研究手法の教授に重点を置いている。

なお、大学院講義科目としては、このほかに「西洋経済史」、「東洋経済史」、「日本経済史」がある。これらは、当該経済史分野における特殊かつ重要な問題を、分析方法論とともに集中的に講義・研究することを目的としている。

本研究科における経済史部門は、総じて、史資料の解読・分析に基礎を置いた実証的歴史教育を行いながら、「比較経済史」や「文明史」などにみられるように、理論的分析力、歴史的構想力を養う教育を重視している点に特徴があるといえよう。